



ドイツには受験はないが、大学に入るには高校卒業時に大学入学資格を取らなければならない。「そのための勉強が大変だ」と嘆く声を最近よく聞く。

日本の受験を知っている私から見ると、全くたいしたことないと思うのだが、週末も長期休みも宿題がないドイツでは、試験のために家で1日2、3時間勉強するというのは大きな負担に感じられるらしい。しかも学校は午後1時過ぎに終わるというのに。

そこで言われるのは「何のために勉強するのか、学校は何のためにあるのか」。ドイツの新聞で「学校は、社会に出る準備をすること」という議論を読んだ。大事なのは、机上の勉強で知識を得ることでなく、成人(ドイツは18才)したら自立して生きていく力をつけること。経済的にという意味でなく、社会全般を知り、その中で自分の役割を見つけることである。

それを以前から実践している学校を紹介したい。ハノーファーにあるグロッケン校は公立で、1年生から10年生(日本でいうと高校1年生)までの一貫校である。1年生から3年生、4年生から6年生が混合クラスとなっており、ひとクラス22人。新入生は毎年22人と少なく、

希望者が多い場合はくじ引きである。

校長先生に案内されて校内を見た。体を動かすことで集中力が高まると、廊下など校内のあちこちに、アスレチックや鉄棒が用意してある。教師にも体を動かすことを奨励しており、職員室のそばに先生専用の卓球台がある。

校庭は広くて木がたくさんあり、子どもたちが走り回って遊んでいる。先生と生徒たちは敬語を使わず、アットホームな雰囲気である。演劇や工作など芸術にも力を入れている。

1年生から3年生の混合クラスでは、各自が自分のレベルに合わせて勉強し、中にはソファーに座ったり、ベンチに寝そべって書いている子もいる。

各クラスに障がい者の子どもが二人いて、付き添いがついている。ダウントン症の子もいれば、筋肉が弱くて歩けない子もいるが、クラスの一員として馴染んでいるように見えた。

1週間にプロジェクトの時間が6時間あり、「演劇」「老人」「難民」「レストラン」のテーマで、地域と関わるプロジェクトをしている。老人の買い物に付き添ったり、一緒に運動するほか、難民施設の手伝いや、地元の食材を使った料理を地域の人と食べるレストランも好評である。

また他校に例を見るのは「挑戦」と

田口理穂*ドイツのエコあれこれ

No. 11

子どもの自主性を育むグロッケン学校



1年生から3年生までの混合クラスの教室。ソファーやベンチが置いてある。

いうプロジェクト。1年かけて準備をし、年に3週間学外で自分の苦手なことやしたいと思っていたことに挑戦する。例えば舞台で歌う、バンドを結成する、森でテント生活をする、自転車旅行をするなど何でもよい。

社会を体験するのは生きていくうえでとても重要で、かつ外に出ることで学校の役割も再確認できるだろう。

この学校は、合う子と合わない子がいるだろう。しかしこういう学校が公立で存在するというのが素晴らしいと思う。先生たちも希望すればほとんど異動はないので「学校をよくしていこう」と長期的視点で取り組んでいる。子どもも先生もこの学校が大好きなのだ。もちろん自主性を尊重し自分の強みを伸ばすことに重点がおかれるため、苦手なことはそのまま放っておられる傾向にある。しかし何でもまんべんなくできる必要があるのでどうか。いろいろ考えさせられた。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂



明はテレビで見たポリネシアのボラボラ島に行きたくてしようがない。他にもアフリカのサファリや(クラスの子が動物を見たと自慢するから)、アマゾン川(すごく長いから)を見たいといいます。「遠いしねえ」と言葉を濁していると、

11月20日世界子どもの日に学校でもらった「子どもの権利」の冊子を取り出し、「ほら、ここに『第13条：君は自分の考えていること、感じていることを伝える権利がある』って書いてある」と主張します。

「でもお金もかかるし、わからない」と答えると「『第12条：君は自分の意見をいう権利があり、大人は真剣

に受けとめること』だって。だからぼくのいうこと聞いて」と食い下がる。

「旅行は他にも行ってるでしょう、秋休みはオランダに行ったし」というと「ぼくは嫌なんだよ、ママばかり勝手に決めて。『第3条：大人が君について何か決める時、何が君にとって最善であるか考えなければいけない』。ぼくにはボラボラ島が一番なんだ」。

ああ言えばばこう言うで、最後には「ママはぼくのこと全然考えてない！」と泣き出しました。11歳にもなって、そんなことで泣くな！ 結局島への行き方や費用を明が調べ、それからまた考えることに。機嫌を直した明が「ママ、このこと書く？ 書いていいよ」というので、恥ずかしながらここに書いています。